

○第38回（平成25年1月15日）評価委員会評価

今年度の連携排砂は、6月19日から6月21日にかけて実施された。

なお、連携通砂・細砂通過放流については、実施基準に該当する出水が生じなかったため実施されなかった。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量約61万 m^3 に対し、約44万 m^3 となり、排砂前に設けた想定変動範囲の約49万 m^3 から約65万 m^3 の内に収まらない結果となった。

水質、底質および生物相の環境調査結果をみる限り、連携排砂による一時的な環境の変化はあるものの、大きな影響を及ぼしたとは考えられない。

今回の連携排砂における実施経過及び環境調査結果から以下の知見が得られた。

◇連携排砂について

・出し平ダムでは、目標排砂量約61万 m^3 に対して約44万 m^3 の排砂量となり想定変動範囲（約49万 m^3 から約65万 m^3 ）内に収まらない結果となった。

これは、平成23年連携通砂時のピーク流量が約760 m^3/s であり、かつ480 m^3/s 以上の流量が約18時間継続した大きな洪水時に、河川湾曲部内側に粒径の比較的大きな土砂が堆積し、今回の自然流下時流量（約200 m^3/s ）では一部排出されなかったものと考えられる。

・出し平ダムボーリング調査結果によると、排出されなかった土砂は、比較的大きな粒径が大きく、COD等の測定値を見る限り、今後排砂しても特に環境に影響を与えるものではないと考えられる。

◇水質調査について

湛水池及び河川では、全般的に概ね過去の測定値の範囲内であった。

海域では、代表4地点（C点、A点、河口沖、生地鼻）のSS、CODが、過去の測定値の範囲以下であった。

◇底質調査について

湛水池では、

・出し平ダム湛水池内では、排砂1日後（6月22日）の調査結果は、5月と9月の調査時に比べてCOD・全窒素および硫化物の測定値は低く、ORP（酸化還元電位）

の測定値は高く、また、50%粒径の値はやや粗くなった。

- ・宇奈月ダム湛水池内では、排砂1日後（6月22日）の調査結果は、5月と9月の調査時に比べCOD・全窒素および硫化物の測定値は概ね低く、ORP（酸化還元電位）の測定値は、一部の地点で測定値が低下した箇所はあったが、比較的高くなった。なお、50%粒径の値は排砂1日後調査で細くなる箇所はあったが、概ね過去の測定値の範囲内であった。

以上のことから、連携排砂の効果がみられた。

河川では、

- ・5月および9月における各調査地点の調査結果は大きな変動がなく、連携排砂の影響はほとんど認められなかった。
- ・今回の排砂後の措置の効果については、排砂計画に定める実施時間3時間に対して人身事故の影響により、1時間程度の実施となり、明確な効果を把握出来なかった。

海域では、

- ・5月および9月における各調査地点の調査結果は、一部の地点でCOD・全窒素・硫化物など過去の測定値を上回ったが、概ね過去の測定値の範囲内であった。

◇水生生物調査について

- ・アユの肥満度について、出・洪水時において一時的に影響を受けるものの、その後は回復していることが確認できた。また、常願寺川においても同様の結果となった。今後も調査を継続していく必要がある。

◇海域における底質ボーリング調査について

- ・本委員会で出された意見を踏まえ、実施機関で引き続き検討すること。

◇今後の留意点

- ・次回の連携排砂の実施については、今回の審議内容を踏まえ、目標排砂量等の設定について検討の上、次年度の排砂計画に反映させること。